

Lesson6 No Pet Raccoons, Please!

かわいいので、人々はアライグマが好きだ。日本にいる人はアライグマをペットとして飼うことが好きだが、それは違法になってしまった。2005年6月1日、外来種の輸入に関する新しい規制が始まった。これらの規制の目的は、生物多様性や人々、そして日本の農業、自然にはここに住んでいない種(しゅ)から守ることにある。アライグマはかわいいが、日本では侵略的外来種なのである。

侵略的外来種は、元々の生息地では普通は問題を起こさない。元々の生息地の外で、彼らは問題を起こしうるのだ。例えば、クズは日本では非常に一般的で滅多に問題にならないが、アメリカではそれが侵略的外来種となってしまったのである。クズは、手に負えないままにアメリカ南部一帯に増えていったのだ。

アライグマは日本ではどんな問題を起こすのだろうか？アライグマは多くの種類の食べ物を食べる。北海道では、「侵略者」のアライグマは、ニホンザリガニやエゾサンショウウオといった希少在来種を食べるのが好きだ。彼らは鳥の生息地にも影響を及ぼし、鳥が巣を作りづらくなってしまった。アライグマによる別の種類の動物への悪影響も報告されている。

新しい規制の対象となる他の2つの侵略的外来種が、カミツキガメとブラックバスである。カミツキガメはペットとして日本に持ち込まれ、ブラックバスは釣りのために湖に放たれた。

カミツキガメはペットとして広く人気がある。このカメの口は非常に強力で危険だ。彼らは何でも食べるのだ。カミツキガメが全ての植物や昆虫、魚やその他の動物を食べてしまうことにより、陸水生態系が傷つくかもしれないという懸念がある。

ブラックバスは、スポーツで釣りをしに行くのが好きな人の中では非常に人気がある。しかし、ブラックバスは池や湖の生態系に大きな影響を及ぼしうるのだ。例えば、宮城県鹿島台のある池をブラックバスが侵略して以来、日本在来の希少種の魚を見つけるのが不可能になってしまった。科学者らは、ブラックバスのトンボに対する悪影響についても懸念している。

ブラックバスを侵略的外来種のリストに載せるという決定は容易なことではなく、白熱した議論がたくさん交わされた。それは人気のある魚であり、スポーツフィッシング業界の人が損をしてしまうかもしれないのだ。

日本に持ち込まれた侵略的外来種の中には、人々の仕事を助けるという目的で持ち込まれたものもある。ジャワマングースは沖縄に持ち込まれた。問題はそれがそこで食べ始めた物である。ハブを殺して食べると考えられていたのだが、代わりに他の種を食べたのだ。

実は、マングースはほとんどハブを食べない。ハブは夜に活発になるのに対し、マングースは日中に活発になるのだ。ハブを殺すために沖縄にジャワマングースを放ったのは間違いだった！

別の例がセイヨウマルハナバチである。従業員数と、温室でトマトを育てるための化学薬品の使用を、ハチを使うことで減らせると農家の人は考えたのだ。しかし、セイヨウマルハナバチは他のハチよりも相当強いので、巣を作ってハチミツを集めるため、すぐに他のハチの生息地を侵略してしまうことが今では知られている。既にセイヨウマルハナバチが生態系の一部となっている中東諸国では、在来のハチが著しく減少してしまった。日本では温室の外でセイヨウマルハナバチが見かけられることもあり、科学者らはそれが増加して将来的に問題になるのではないかと懸念している。

侵入生物種が新しい環境に持ち込まれると、それは必然的に、その生態系に属する他の種と張り合い始めることになる。外来種の力が強ければ、在来種は生き残れない。生物侵入と呼ばれるこのプロセスは、世界中の在来種が希少になるか絶滅するかの原因となるのだ。

生物多様性の重要性については理解しなくてはならない。生物多様性とは、動物や植物、昆虫、そして目に見えないとても小さな動植物までも多様性なのである。まだ研究していない小さな植物や動物の中にどんな宝物が見つかるかも分からないので、生物多様性は守られる必要があるのだ。ガンの良薬は森の中にある木や茂みの中に隠れているかもしれない、日本にだってあり得る、と言われることもある。

日本には他のどこにも見つからない動植物がいるため、ある環境 NGO は日本を生物多様性の「ホットスポット」、地球上の宝物庫と呼んでいる。こうなると、将来の世代のために自然の宝物(天然記念物)を守ることは私たちの責任なのである。